

## 緑の鏡の池の神

客「いい湯だね。わざわざ足を伸ばして来たかいがあったよ。

主「ここは初めてですか？

客「あれ、湯けむりの向こうにどなたかいらっしゃいましたね。これは失礼しました。私、初めてなんですよ。

主「ここは酸性の湯でしてね。

客「そうなんですか。

主「ええ。そこから出てるお湯ちょいと口に含んでみてください。

客「（飲む）本当だ。ほんのり酸っぱいような。

主「それ飲むと胃に穴が空くんですよ。

客「え？ちょっと飲んじゃいましたよ。

主「大量に飲まなければどうって事ありませんから。

客「脅かさないでください。

主「昔は侍が刀傷治すのにも使われたんですよ。

客「へー

主「ちょっとした切り傷だったら、ここの湯に一晩浸かれば、翌日にはどこ怪我したかわからないぐらいきれいに直してくれます。

客「よかった。いい所にきましたよ。あなた詳しいですね。こちらには何度も？

女将「失礼します。

客「あら、女将さんですか。

女将「お客さん、ちょっとごめんなさいね。なんだってお前さん、こんなところで油売ってんだい。

客「え？女将さん、こちらの方は知り合いで？

女将「知り合い、冗談じゃない。うちの主人ですよ。

客「はい？

女将「いいから早く上がりなさい。

客「お客さんじゃないんですか？

女将「うちの主人ですよ。みんなで木管運ぶんでしょう？サボってる場合じゃないの。男衆の仕事なんだから。

客「主でしたか。道理で詳しいわけだ。

女将「どこの宿屋にお客さんと一緒に温泉使ってる主人がいるんだい。はやく上がるんだよ。

主「無理に引っ張るなよ。この間くじいた足がまだ治ってないんだか。

客「主、さっき刀傷が一晩で治るって。

主「お客、これが捻挫ってのは時間がかかるんですよ。その点切り傷なんてのはね…

女将「いいからみんなの手伝いするんだよ。

客「へんな宿屋だなあ。

客「いい湯だったね。ひとつ風呂浴びてゆっくりってのもいいもんだよ。（ふすま開ける）おや、いつの間にか布団引いてあって、こういう…あれ？俺の布団で誰か寝てないか？ ちょいとあなた、部屋間違えてないかい？

主「あ、寝ちゃったか。お客さん。布団敷いときました。

客「主だ。あたしの布団で寝てたのかい？

主「布団敷いてたんですよ。

客「枕に頭載せて、布団被ってかい？

女将「あら、お客さん、ごめんなさいね。ちょいとお前さん、またお客さんの布団で寝てたのかい？

客「またって、女将さん、よくあるんですか？

女将「居なくなると、大抵ここですよ。全く、早く仕事に戻るんだよ。

主「おっかあ。あんまり強く引っ張るなよ。捻った足が痛むんだ。

客「女将さん、主の怪我ってのは最近やったのかい？

女将「いいえ半年前ですよ。

客「治ってないじゃないか。

女将「お休み中失礼します。

客「あ、女将さんだ。ええ。なんですか？

女将「うちの主人来てませんか？

客「はい？

女将「隠し立てするとお客さんにとってよくない結果になりますよ。

客「ちょっとまってください。宿の人が部屋に来ることがあるんですか？

女将「ええ。うちのお客さんの部屋に入り浸って、よくお酒をたかっているんです。

客「そんな宿屋聞いた事ないですよ。

女将「居ないんですね。わかりました。信用しましょう。ここに居ないとなると、さてはお隣の宿屋にだよ。

客「いったいどうなってるんだよ。

女将「どこ行っちまったんだろう。あ、いた。ちょいと。

主「でかけてくるよ。

女将「ちょっと。待ちな。都合が悪くなるとどこか出かちまって、この宿六が！

主「なんだってあんなにうるさくなっちゃったかね。それに比べるとここは静かでいいねえ。そうだ早く行かないと日が暮れちゃうよ、カツ丼でも食いにいくか。もう終わっちゃうじゃねえか。明日でいいか。

神「何しに来た。

主「びっくりした。誰だ！その暗がりに誰かいるな。

神「俺か？俺はこの池の神様。

主「神様？

神「池の神様。池上だ。

主「池上？

神「そう。なんでも知っている。すべてのことを明らかにする。池上のあきらだ。

主「それ、人の名前じゃないですか？

神「いい質問だ。

主「あなた本当に神様なんですか？

神「疑ってるな？

主「そりやそうですよ。

神「わしは溶かしの神だ。

主「溶かしの神様？

神「ここには安達太良の温泉が流れ着く。やがてそれは強酸性の池となり、あらゆるモノを溶かしてしまうのだ。

主「だからこっちの池には草も生えてねえし、鯉も泳いでないんですね。

神「お主、足を怪我しておるな。

主「わかるんですか？

神「見たところ、もう治っておる。

主「え？

神「緑が池に痛い足をつけてみよ。

主「ここですか？だって強酸性だって。

神「何、すぐに溶けるといわけではない。いいからやれ。

主「つけました。

神「どうじゃ？

主「あ、本当だ。痛みが消えました。

神「そう。痛みを溶かしてやったのだ。もう大丈夫。

主「ありがとうございます。助かりました。

神「珍しいなあ、向こうでなく、こっちに来るやつは。

主「え？ あ、あっちの鏡ヶ池の事ですか。ええ。賑わってるのはあっちですけどね。鏡みたいによく映るんで、なんだか行きたくないんですよ。こっちの緑が池には誰も来ないですから、静かでもいいんです。

神「静かなのも当たり前。音を溶かしたから音が聞こえないのだ。わしはなんでも溶かす事ができる。全てを溶かす事ができるのだ。先日もそう言えば

主「何か溶かしたんですか？

神「働かない亭主に悩む女将の気持ちを溶かしてやったぞ。

主「え？亭主が働くようになったんですか？

神「いや、悩む気持ちを溶かしてやった。だから、亭主が働かなくてもイライラしない。

主「問題先送りにしてるだけじゃないですか？

神「あとは、国を作ったけどやめたいという悩みも溶かしてやった。

主「そんな悩みがあるんですか？

神「いや、あれは溶かす前に自然と国がなくなってたな。

主「何もやってないじゃないですか。

神「後継者問題に悩む湯守の悩みを溶かしてやったぞ。

主「どうしたんですか？

神「後継者が現れなくても危機感を感じなくなった。

主「それ駄目ですよ？

神「いや、願いを叶えてやってるのだ。感謝しろ。

主「変な神様だね。そう言えば、女房の愚痴を溶かしてくれるんですよ。今度うちのおつかあを連れていけばガミガミ言わなくなるかもしれねえ。

なんて、言って女将さんを連れて来ようと思いますが、

馬鹿なこと言ってるんじゃないよ。忙しいんだから手伝わないなら、どこか言っておくれ。邪魔だから。

主「亭主捕まえて邪魔って事はねえまじゃねえか。腹が立つね。そうだ。この腹立ちを緑が池で溶かしてもらおう。

神「面白い依頼だな。よし。溶かしてやる。

おスッキリした。こいつはいいや。みんなにも教えてやろうと男衆を集めてこの話をする。

男「嘘でも話のネタになるよ。よし行ってみよう。あ、本当に居たよ。溶かしの神だよ。

神「なに？宿屋をやってるけどお客さんが来なくて焦ってる？よし。その焦る気持ちを溶かしてやろう。

男1「ありがとうございます。客なんて来なくていいや。

神「なに？赤字が続いてどうしていいか困ってる？よし。その困ったという気持ちを溶かしてやろう。

男2「ありがとうございます。赤字でいいや

神「なに？朝起きるのが辛い？よし、では朝起なくてはいけないと思う気持ちを溶かしてやろう。

男3「ありがとうございます。昼過ぎに起きればいいや。

なんて大変な騒ぎで。

女将「ちょいとご隠居さん、何とかしてくださいよ。

隠居「おいおい、どうした？女将さん会を筆頭に、女将さん連中がやってきたよ。

女将「私達が宿を守ってるのに、男共は仕事もしないで怠けてばかりなんです。

隠居「そんな事はないだろう。お客さんを集めようと色々画策してるなんて話を聞いているよ。

女将「なんにもやっちゃいないんですよ。

隠居「そんな馬鹿な。ん？どうした？温泉が止まった？そんな馬鹿な話があるか。湯守はどうした？え？寝てる？なんで寝てるんだ。急いで起こすんだよ。湯を守る責任ってのがあろう。

男「ご隠居さん。

隠居「なにがあった。

男「聞いてきたんですけど、その責任を溶かしたからもうやらなくていいそうです。

隠居「馬鹿な事言ってるんじゃない。いったいどうなってるんだ。何があった。え？緑が池の神様？なんだそれは。よし、ここで話しても仕方がない。向かってみよう。

神「何を溶かそうか。

隠居「こいつか、男衆をたぶらかしたのは。おい、いい加減にしろ。このままじゃこの街が滅びちまう。もとに戻せ。

神「よし、元に戻せという気持ちを溶かしてやろう。

隠居「余計なお世話だ。だめだ。こいつじゃ話にならない。何か手立ては…。そうだ。緑が池に神様があるなら、鏡ヶ池にも神様が居てもおかしくない。行ってみよう。

隠居「鏡ヶ池の神様！神様！

女神「何よ煩いわね。

隠居「居た！これこれこういう訳で困ってるんです。知恵を貸してもらえませんか？

女神「私は鏡が池の女神。そんな事容易いわ。

隠居「どうやるんですか？

女神「鏡は自らを映す。答えは己の中にある。しっかりと己を見つめればそこに答えはあるわ。それじゃ。

隠居「ちょっと待ってください。

女神「うるさいわね。今友達のGamma仙人が遊びに来てるの。じゃね。

隠居「弱ったね。機嫌が悪いのかね。とにかく村の男衆を鏡ヶ池に集めよう。

連れてくると無気力な男達が鏡ヶ池を覗き込む。そこに映った己の顔を見て目が冷めた。俺はいったい何をやってたんだ。無精髭はやして、こんなんじゃお客さんを迎えられない。おい、温泉が止まっている。俺は何をやってたんだ。

次々と正気を取り戻します。

しばらくすると、また街は活気づいてくる

女将「ちょいといい加減にしなよ。この宿六が！

主「おい！何が宿六だ。

女将「言われたくなかったらしっかり仕事するんだよ。

主「わかってるよ。

隠居「良かった。一時はどうなるかと思ったよ。おいおい、女将さんそんなに亭主をいじめるんじゃないよ。

女将「いじめてません。

隠居「そうだ。どうしてお前さんたちは緑が池に行かなかったんだい？嫌な事を忘れさせてくれる。何だって溶かしてくれるんだぞ。

女将「溶かす？それなら間に合ってます。

隠居「どうして？

女将「私達は旅館の女将よ。身だしなみに気をつけて、いつだって髪を溶かしてますから。